



るのほな

編集兼発行者

千葉大学医学部

るのほな同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472)22-7171内線2011

千葉大学医学部同窓会報 第63号 題字 鈴木五郎

昭和五十二年 度 るのほな同窓会総会開催

— 中味の濃かった総会 —

昭和五十二年度のるのほな同窓会総会は、6月18日千葉市内グラウンドホテルにおいて3時半から開催された。有益常任理事の司会であらう大塚会長の挨拶、ついで横川医学部長の医学部近況報告が行なわれた。井出常任理事から五十二年度の会議・会報発行、支部連絡等についての会務報告があり、昨年度中に判明した物故会員に対する黙祷が捧げられた後、大塚会長が議長となつて議事に入った。

人事関係では相磯前学長、松本前看護学部長、北村・久保両前教授を名誉会員に推せん、同窓会副会長(学内支部長)には松本副会長の後任として井出教授、北村・井出、故高木常任理事の後任には佐藤博、石川清文両教授および内田成和(昭17卒)氏が、また理事として山口豊(肺研教授)が満場一致で推せんされた。

会計関係では昭和五十一年度決算(別表1)が萩原常任理事から

報告され、佐藤会計監事の監査報告の後承認されたが、昭和五十二年予算(別表2)については、基金より百万円を繰入れないと成り立たないため、会費増額に関する議案とからめて審議、結局、予算については原案通り可決、会費については次年度より二千円とする事が決定した。なお会費納入法については信託銀行を介することが望ましいが、このうち東洋信託を介するものについては、契約更改時に貸付信託より金銭信託に切り替えて行くことが提案された。

さらに、百周年記念事業については、記念誌は今年末を目標に編集が急がれていること、植樹についてはすでに前年度に樹種を決定根まわしも行なわれており、新病院周辺地域を含めて、矢作亥鼻地区の整備をまつて、至適の位地に移植する手筈になっていることが報告された。また、同窓会館につ

昭和五十二年 度春の叙勲

勲二等瑞宝章 安中正哉氏(昭和5年卒) 元長崎大学解剖学教授
 勲三等瑞宝章 小林金市氏(昭和8年卒) 千葉県医師会長・加藤産婦人科病院長・現住所千葉市本町2-1-18
 勲四等瑞宝章 小川清文氏(昭和17卒) 元長崎大学解剖学教授
 元本学解剖学助教授・高知女子大学長・現住所高知市南久万1-4

いても地区整備後に場所をきめることになるが、現在四候補地について検討中であり、また新築する場合の青写真についても、井出常任理事から説明があった。

これに対して出席会員の中から、たとえば各クラスの植樹も行ないたいが、それについて記念になる標識を統一してつくるよう検討してほしい。失なわれゆく自然を確保する努力をすべきである。同窓会館建設にかかわる費用については、綿密周到な計画が必要である。

等、熱心な発言が続き、出席者約五十名の小人数な会ではあったが、久しぶりに内容のある総会となった。

最後に故高木先生の後をついで千葉県医師会長に就任した小林金市先生、今年秋に選挙の行なわれる学術会議に立候補予定の本間教授の挨拶があつて、別室の懇親会に移った。懇親会は井出学内支部長の司会により、終始和やかに賑やかに進行し、午後七時近く散会した。

久保政次医学部附属病院長が本年三月末日をもって任期満了のため、新病院長として、第二外科



佐藤博教授が選任された。丁度、新病院完成の時期に重なり、佐藤教授の豊富な経験に基づく御活躍が期待される。新院長は就任の感

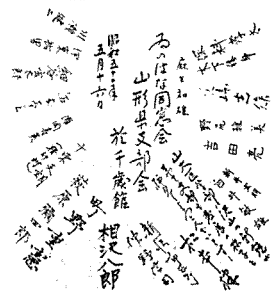
佐藤博教授(昭20卒) 病院長に就任

想を次のように述べられた。本年四月より前院長である久保教授の跡をうけて、病院長に就任いたしました。つつしんで皆様に御挨拶申し上げます。今回の病院長就任にあたりましては本年度中に新病院の完成が見込まれ、新病院の設備、移転と云う大きな事業が含まれておりますので、一層の皆様御支援、御鞭撻、御協力が無いと叶わぬ事であり、私といたしましても全力を尽す所存でございますので、宜しく御願い申し上げます。

山形るのほな会の記

五月十六日、千葉大学から松本佐藤(老)、吉田、萩原四教授をむかえ、上山市千歳館で、るのほな

活躍中の麻生(和)、新井(宏)十東、白井四教授など二十名を越す出席者(現在確認されている会員二十五名)があり、同日午後山形大学医学部の新病院を見学して来た感想や、逆に昔の千葉の思い出話など、話題が尽きず、土地の佳酒佳肴が話に油をそそいで、なごやかな盛大な会であった。



会費納入方法 について

会費納入方法の一つとして、信託銀行を利用する自動納入法をおすすめしていますが、「五年満期」の切替の時期が来ています。現在、東洋信託銀行では、貸付信託方式を用いていますが、この方式は利率は良いのですが、切替のし方が面倒です。そこで金銭信託に変更してはどうかという提案があり、いざ行員がおうかがいして説明申し上げる予定ですが変更されても決してご損にはなりません。かえって便利だと思いますので、この方式をご利用下さるようお奨めします。

なお、三井信託ご利用の方は従来通りで変わりはありません。

(別表2)

昭和52年度 予算編成案

(別表1)

昭和51年度 決算報告

昭和51年4月1日より
昭和52年3月31日まで

A 歳入の部

科目	予算額	前年度比(△減)
財産収入	200,000	20,000
会費収入	2,200,000	200,000
事業収入	0	△3,040,000
寄附金等	100	0
繰越金	141,078	△1,735,296
繰入金	1,000,000	1,000,000
収入計	3,541,178	△3,555,296

B 歳出の部

科目	予算額	前年度比(△減)
1. 事業費		
会報発行費	400,000	0
名簿発行費	0	△4,000,000
新会員歓迎費	180,000	0
顕彰奨学費	250,000	0
慶弔費	70,000	20,000
支部連絡費	150,000	50,000
小計	1,050,000	△3,930,000
2. 事務費		
備品費	30,000	0
消耗品費	100,000	75,000
通信印刷費	1,500,000	300,000
振替手数料	70,000	0
会議費	150,000	△30,000
諸手当	550,000	50,000
謝金	50,000	0
小計	2,450,000	395,000
3. 積立金および予備費		
予備費	41,178	△20,296
積立金	0	
支出計	3,541,178	△3,555,296

基金 5,500,000-1,000,000(繰入金)
-500,000(100周年記念事業費)=4,000,000円

A 歳入の部

科目	予算額	年度末収入計	差引高(△減)
財産収入	180,000	220,636	40,636
会費収入	2,000,000	2,709,900	709,900
事業収入	3,040,000	2,851,800	△188,200
寄附金等	100	26,213	26,113
繰越金	1,876,374	1,876,374	0
収入計	7,096,474	7,684,923	588,449

B 歳出の部

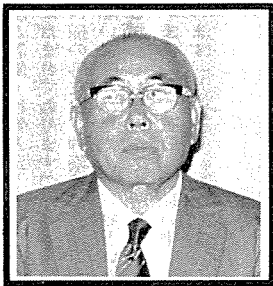
科目	予算額	年度末支出計	差引高(△減)
1. 事業費			
会報発行費	400,000	364,840	△35,160
名簿発行費	4,000,000	4,000,000	0
新会員歓迎費	180,000	170,000	△10,000
顕彰奨学費	250,000	200,000	△50,000
慶弔費	50,000	57,500	7,500
支部連絡費	100,000	75,000	△25,000
小計	4,980,000	4,867,340	△112,660
2. 事務費			
備品費	30,000	0	△30,000
消耗品費	25,000	82,140	57,140
通信印刷費	1,200,000	1,860,795	660,795
振替手数料	70,000	105,210	35,210
会議費	180,000	80,600	△99,400
諸手当	500,000	490,210	△9,790
謝金	50,000	50,000	0
小計	2,055,000	2,668,955	613,955
3. 積立金および予備費			
予備費	61,474	7,550	△53,924
積立金			
支出計	7,096,474	7,543,845	447,371

繰越金 141,078
基金 4,500,000+1,000,000(特別会計予算残)=5,500,000円

すでに昨年のことになったが、51年10月19日に丸の内東京会館で第12回谷崎潤一郎賞の贈呈式が行なわれた。受賞者は藤枝静男氏であった。るのほな同窓会名簿の昭和11年卒の項をみると、三番目に相磯前学長のお名前があり、十八番目に「勝見次郎」八高、浜松、眼科とあるが、この方が文壇に円熟した私小説の大家として認められていた藤枝静男氏の人である。志賀直哉に私淑して三十九才

第12回谷崎潤一郎賞に輝く
勝見次郎(藤枝静男)氏
(昭11卒)

前千葉県医師会長、るのほな同窓会常任理事、高木良雄先生は、去る5月18日脳軟化症のため本学附属病院にて他界された。生前船橋市長をつとめられたこともあり、千葉県医師会、船橋市の合同葬が6月28日に行なわれた。要職を歴任された方だけに盛大な告別式であった。なおその功により、従五位勲四等に叙せられた。



高木良雄先生
(昭10卒)
他界される

★(52・5・27)記念講演南会議室にて
五十二年度総会の開催につき最終的打合せ、学内支部長に井出常任理事が昇格し、石川清文(基礎)、佐藤博(臨床)の二氏を常任理事にこの件が了承された。また会費を年二千円と値上げする件の内諾を得た。

★(52・4・22)記念講演南会議室にて
五十一年度決算報告、五十二年年度予算案をめぐり、五十二年総会について討議した。今秋の学術会議会員選挙につき一般の交見を行なった。百周年記念事業の経過報告、新病院開院式の予告等につき話し合い、記念講堂北会議室を施設係が当分使用する件を了承した。

ではじめて作品を発表したというから、作家としての出発は決してはやかったとはいえないが、眼科医として開業のかたわら、次第に文壇にみとめられ、今や一流中の一流の作家になられた。「私小説の大家が不思議なものを書いた」といわれ、今回の受賞に連った作品は「田神有楽」という。妙な骨とう屋の語る形式で変哲もなくはじまるこの作品は突然に奇妙な変化をみせはじめ、最後は骨とう屋自身が実は弥勒菩薩の化身であり諸仏交観図を織り成すという奇妙な小説であるが、著者の説くところは万物流転、不生不滅の思いであるようだ。

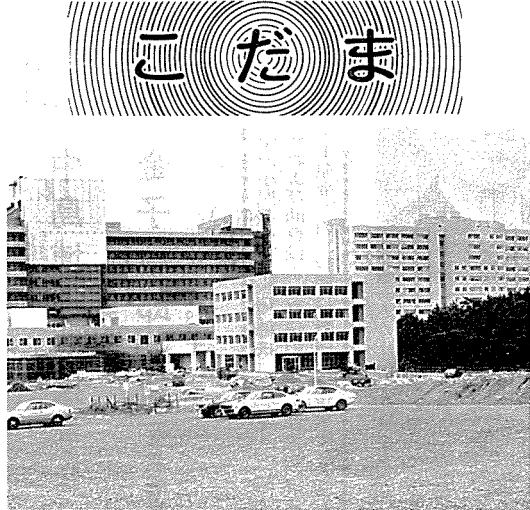
常任理事会記録

浜松医科大学だより

教 授 川 名 悦 郎

浜松医科大学は昭和四十九年六月に静岡県西のはずれである浜松に単科の医科大学として開設された。同年七月には第一回生の入学をきめ、医学教育が始まった。真夏には屋根に放水してやつと室温を下げたプレハブの仮設の教室と歩けば床のきしむ戦前の木造の校舎(女子短大のとりこわし予定だった兵舎)とでの教師にも学生にも過酷な講義であった。現在では、家康が信玄と戦った三方原台地で、天竜川低地を望む東端に、学年進行にともなう、研究棟及び教育棟、福利棟、動物・R・Iセンター、重金属回収及び廃水処理施設、管理棟などが建設されて来た。

第一講座の川名悦郎教授(昭33年卒)及び生理学第一講座の安達(旧姓、宇佐美)恵美子助教(昭37年卒)、衛生学講座の桜井信夫教授(昭24年卒)、平野英男助教(特別会員)、公衆衛生学講座の本宮建教授(昭34年卒)、小倉敬一助教(昭36年卒)、寄生虫学講座の佐野基人教授(特別会員)、荒木国興講師(特別会員)、耳鼻咽喉科学講座の野末道彦教授(昭33年卒)、脳外科学講座の植村研一教授(未着任、昭34年卒)、中島正二助教(未着任、贊助会員)の十一名で、それぞれ、講座の整備をしながら、教育・研究に打ちこんでいる。赴任してまもなくこれから活躍をと思われている



(左) 附属病院 (右) 研究棟
(前方) 管理棟

谷川久一氏(昭32卒)
久留米大学
内科教授に

本学を昭和32年に卒業され、第一内科より久留米大学の第二内科に行かれ、助教として活躍されていた谷川久一氏は、このたび岡部教授のあとをうけて去る5月1日付で久留米大学医学部第二内科の教授に昇任された。御活躍が期待されている。

小島莊明氏(昭40卒)
信州大学
寄生虫学教授に

本学を昭和40年に卒業され、横川教授のもとで助教として活躍されていた小島莊明氏は、去る4

時に、本宮教授及び小倉助教、平野助教の三氏が退職又は転勤などにより本学を去られたのは、本学にとって非常に残念なことだった。

昨年八月、沼津で開催された静岡のはな会に、浜松医科大学からは桜井、川名の二名が出席した。静岡在住ののはな会員の懇親を深めることができた。今回の静岡のはな会は浜松で開かれる予定ですので、そのときは、先輩会員に協力して立派な会にしたいと思っています。今後、さらに地元先輩諸先生との連絡を密にしていきたいと考えています。

中沢 淳氏
山口大学
生化学教授に

第二生化学の名助教として活躍されていた中沢淳氏は去る5月1日付にて山口大学医学部第二生化学講座の教授に栄転された。氏は京都大学医学部を昭和36年に卒業された方であるが、本学在任中橋教授をよくたすけられ、後進の指導にその才を発揮された。本学にとけこまれてすごされた数年の姿よりみても将来が期待されよう。

昇任

厚生省人事移動
松浦十四郎氏(昭23卒)
山中 和氏(昭24卒)

この度の厚生省人事移動にて、本学先輩の松浦十四郎氏が公衆衛生局長に、また山中和氏が環境衛生局長にそれぞれ昇任された。この方面の行政がきわめて重要視されている現在、両氏の手腕に期待すべきものがあろう。

国立横浜東病院
新築落成祝賀会

本学昭和23年卒の上野高次氏が院長として活躍されている他、多くの本学出身者が各ポストを占めている国立横浜東病院では、かねて新築をすすめていたが、この度完成し、去る6月23日竣工祝賀会が盛大に催された。いづれ時をみて本会報の「こだま」欄に紹介記事の執筆を依頼する予定である。

市原市国保市民
病院の改築落成

加茂病院は去る2月1日より市原市国保市民病院と改称されているが、それに先立ち1月末には改築が完成し、養老溪谷に近い美しい病院として落成式が盛大に行なわれた。ちなみに院長は本学昭和28年卒の中山善三郎氏である。

書評

仙波恒雄・矢野徹著
精神病院
その医療の現状と限界

本書の舞台は、千葉県船橋市にある病床三〇〇の私立単科、荒木教授以来の本学のいわゆる関連精神病院であるが、又体制批判の色濃い若い医師たちの拠点でもある。著者仙波氏は本学昭和32年卒、この病院の第三代院長、矢野氏は40年卒かつての医員である。

本院でのさまざまな先駆的試みは、時々新聞紙を賑わすが、本書はこの七年間の病棟開放化の実践報告書である。しかしその背景にわが国精神科医療の特性、関連する法律の解説、あるいは学会、大学の混乱のいきさつ、資料などが組みこまれ、一病院開放化の記録をこえて、時代的意味を持っている。

すでに毎日新聞その他に多くの書評がのり、著者らの立場への賛否をこえての評価があるようであるが、精神科の問題のみならず、医療問題一般に関心をもたれる会員の皆さまの一読をおすすめしたい本である。(星和書店発行、定価三〇〇円)

(I・S)



新任

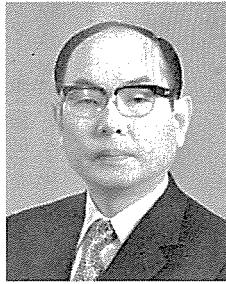
中島博徳教授 (小児科)

(昭23卒)

金子敏郎教授 (耳鼻咽喉科)

(昭28卒)

金沢大学の小児科教授中島博徳氏(昭23卒) (52・7・1発令)および助教授より昇任の金子敏郎氏(昭28卒) (52・6・1発令)の二教授に新任の挨拶をいただいた。



この度懐しの母校小児科教室に戻って参りました。丁度5年間金沢大学にお世話になりましたが、私としては色々な意味で有意義な日々を送らせて戴きました。母校を外から眺めることができたのも大きな収穫だと思っております。現在小児科学は内科がそうであるのと同じように、分化と統合が要求されております。即ち、教育

診療、研究の何れにおいても、サフスペシアリティとその統合をどのように行なうて行くかが、小児の幸福の為に働く我々に課せられた最大の問題と考えられます。これは一教室のみでは解決し難い問題ではありますが、広く教室内外のよきコンムニケーションによって必ず良い方向にもって行けると信じています。又私の任務は若い

人が十分に活躍できる場をつくることにあると思っておりますが、何卒同窓会各位の暖かい御支援をお願いする次第です。

(中島博徳)



このたび北村 武教授の後任として耳鼻咽喉科学講座の担当を拝命いたしました。身に余る光栄と存じますとともに、責任の重大さを痛感して居ります。

一口に耳鼻咽喉科学と申ししましても最近では耳科学、鼻科学、喉頭科学、頸部腫瘍学等々、専門が高度に分化しつつあります。その結果やもすれば生体現象を微視的に見る危険性もありますので、生物学の基本的理念から逸脱しないような広い視野から研究を進めたいと念願しております。

北村教授が二十六年の永きにわたって築かれた輝かしい学問的流れを継承しつつ、教室の発展に努力を傾注する所存ですが、諸先生のご指導、ご鞭撻を切にお願い申し上げます。(金子敏郎)

多田教授

東大併任となる

環境疫学研究施設、免疫研究所の多田富雄教授(昭34卒)は東京大学医学部血清学教室の教授に併任となり、7月1日発令をみた。なお昭和53年4月1日よりは東京大学の専任教授となるため、多田教授の後任については追って検討されることになろう。

本年度の千葉医学会 学術大会は 十一月十二日(土) に開催

昭和五十二年の千葉医学会学術大会は、例年の如く、千葉県医

国立千葉病院 齊藤 弘院長就任披露祝賀会

7月9日(土)午後4時より、国鉄千葉駅ステーションビル6階にて、この度、国立千葉病院の院長に就任された齊藤 弘氏の披露祝賀会が催された。伊藤和人(麻酔科)医長の司会により、湯田前院長の挨拶があり、次いで鈴木五郎元院長が独特の調子で愛情をこめて新院長を紹介し、激励された。前号にも抱負をのせられたように、齊藤院長の誠実さあふれる挨拶があり

師会学術大会と合同にて、来る十一月十二日(土)午後二時三十分より、千葉大学医学部病材示説講堂にて開催される。今回は日本医師会学術活動の方針をも汲んで、主として「感染症」をテーマとする。

(特別講演)

「腸管感染症の病態からみた治療の問題点」

浜松医療センター

小張一峰所長(昭15卒)

(話題)

「感染症の現況」

中央検査部 小林章男助教授他による討論。

本会報編集委員の 徳永毅氏助教授に昇任

本会報の編集委員の一人である第三解剖学教室の徳永毅氏(昭42卒)は、この度同講座の助教授に昇任された。同氏は学究というにふさわしい物静かな神経系の解剖学者で期待されている。

第63回医師国家試験合格発表

数回前よりマルチブルチヨイス方式になり難しくなった医師国家試験であるが、今回の発表では本

学の合格率は八十一・六%で全国平均七十七・四%を上廻った。しかし、受験者一〇三名中、不合格者一九名であり、この人達の取扱いについては悩むところが多い。問題は一九名の内訳であり、そのうちの八名は昨年度以前の卒業生であること、留學生が毎回数名含まれていること、これらが何回か連続して不合格となり合格のパーセンテージを落していることなど考えさせられる。

クラス会名に 御注意を!!

最近常任理事会の席で話題になったことであるが、各クラス会名、たとえば「五二会」の如きは昭和五十二年卒と普通考えているが、なかには入学の年としているクラスもあり、同じ名ものが二つある例があるとのことである。一緒に入学しても卒業が同じということとは保証できないので入学年度を会名にする方が友達甲斐があると

書評

ベッド学級誕生

渡辺治基著

渡辺治基氏(昭26卒)は昭和31年に国立療養所下志津病院にカリエス児のためにベッド学級を開いた。ことは簡単に見えるが、実は厚生行政と文部行政にはさまれたの谷間があつてその出発はなかなかのことではなかつたらしい。それから20年を経て、著者は汗と涙の日々を刻みに記録して本書とした。「かんごふさんに、おぼさつて、お便所へ行つた。びゅー。北風だ」といった子供達の作品までちりばめられている。(東山書房、定価一五〇〇円)



編集後記

この同窓会報を定期刊行するようになってから、いろいろのお便りや電話をいただき、他大学からの会報の入手もまして勉強になる。全国医系大学四十余校をしらべてみたら、同窓会報を年四回以上出している大学は丁度半分の二十校程である。そのうち会費が千

円というのは一校もなく、最低二千円であつた。東大のように十二回で三千元というものもあるが会員数に差がある。会費を二千元に値上げしていただいても会報にまわるとは必ずしも保証できないが、来年どなたか次の編集部をやる方々のために経済的基礎はしっかりとっておきたい。しかし会報を出しつづけるのは金の力ではなく全員の心の問題と私たちの責任感の如何によるであらう。(村山)